

と く
徳

ほ う
朋

安心してがんばれる世界

ましろ よしまろ
真城 義麿

ましろ よしまろ
1953—現在
愛媛県出身。元大谷中・高
等学校校長、元真宗大谷派
学校連合会長、真宗大谷派
普照寺住職

「他力^{たりき}」という言葉はずいぶん誤解されて使われています。それは今に始まったことではありません。「他力」というと「他人任せ^{たにまかせ}」のような感じがしてしましますが、清沢満之先生^{きよざわまんし}は若者に向かって「他力^{たりき}」というのは「他人任せ^{たにまかせ}」から一番遠いことなのだとい、「天命に安んじて人事を尽くす^{あんにんじてにんじをたくす}」という言葉を残されました。当時、福沢諭吉は「人事を尽くして天命を待つ^{にんじをたくしててんめいをまつ}」という言葉が好きでよく使っていたそうです。それに対して、わざとその言葉を引いたうえで、「他力^{たりき}」とは「天命に安んじて人事を尽くす^{あんにんじてにんじをたくす}」ことなのだと言われました。「天命に安んじて^{あんにんじて}」とは大きな安心感をもつということです。仏さまが私たちに願いをかけ、はたらきをかけてくださっている。そのはたらきを「本願力^{ほんがんりき}」といい、また「他力^{たりき}」ともいいます。私の事を絶対に見捨てないといって約束してくださっている仏さまがいる、そこに大きな安心感をもつということです。そのうえで「人事を尽くす^{にんじをたくす}」、つまり私のできることを惜しまずに尽くしていくということです。「早く助けてください^{はやくだけてください}」といって、お客さんのように待っているということではないということです。存在が絶対に見捨てられないというところに安心したうえで、自分のできることを精一杯やり抜くことが出来るようになるという事です。

無理矢理にでも、とにかく根性でがんばれという世界ではありません。何かそこに支えとい

いますか、「大丈夫、心配ないよ」というものがある時、私たちは全力でがんばれるのでしょ
う。すべてを包み込み、うまくいかなかった自分をも認められる世界にふれてはじめて、挑戦
することができるのでしょうか。どの人にも等しく存在価値・存在意義があり、そういう者同士
が生きているというところに立ったところで、大きな安心感をベースとして、私たちは一人残
らず、思い通りにならない現実の中で限りあるいのちを生きていけるわけです。(中略)

「あなたはあなたのままでまるごと尊いのだ」「何も付け加えなくても尊いのだ」と言われ
るのが本願ほんがんの世界です。たとえば、寝たきりになり認知症になって機能的に問題が起こってし
まっても、それは都合に合わなくなったという事です。私たちはやはり自分の都合から出る事
はできません。それは確かにそうかもしれない。しかし、本願ほんがんの世界をどこかにとどめておく
ということが、とても大事なことなのです。

(『安心してがんばれる世界を』)

私たちは自分の願う条件に叶うことが幸せとっていますが、今後どんな事が起ころう
が、事実をいただいて自分を尽くしていけるようなそんな世界に気付いていける事が大切
ではないかと思います。(哲弘 拝)



この「徳明とくほう」は仏教を拠り所として生活した方々の言葉に直に触れ、仏教を頭で一生懸命に理解
するのではなく、この身で感じる事を願いとして副住職が毎月作成しています。

